

アマモ場を回復させよう！

企画開発室 喜安宏能

竜宮の乙姫の元結の切り外し

瀬戸内海沿岸の砂泥域にはアマモと呼ばれる海草が生育しています。アマモは北海道～九州までの内湾や浅海域に広く分布しており、大昔に海から陸上にあがった植物が進化の過程で再び海に戻っていったと考えられている植物です。アマモという名前は海藻（あまも）に由来するという説もありますが、「甘藻」とも書かれ根茎がほのかに甘いことに由来するというのが真説のようです。別名には花穂が長いことから、植物の和名の中では最も長い、リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結の切り外し）というのがあります。分類学上のアマモは、イネやムギなどと同じ単子葉植物になります。さらに詳しく分類すると、単子葉類オモダカ目ヒルムシロ科アマモ属という多年草の海産顕花植物になります。アマモには節のある長い地下茎とヒゲ状の根、イネに似た緑色の葉があり、他の海藻類と最も違う点は花をつけることです。花といっても色鮮やかなきれいなものではなく、極端に退化しており、花を構成する要素である雌しべ、雄しべだけを持ちます。受粉すると、米粒くらいの大きさの黒い種子ができます。



写真1 種子から発芽したアマモ

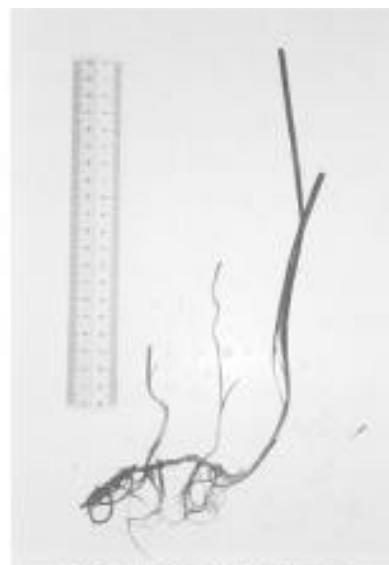


写真2 地下茎から分枝したアマモ

種子の放出と地下茎の分枝で繁殖

アマモには少し変わった性質があり、二つの繁殖方法を持っています。その一つは種子による繁殖です。アマモは春頃から花枝（種が作られる部分）を形成し始め、6、7月に成熟し、種子を海水中に放出します。8月からは古葉が脱落し始めますので、8から9月に防波堤などで釣りをしていると、枯れて海面を漂っているアマモの葉を見

ることがあると思います。そして、11月になるとほとんどの古葉が流出します。12月以降に種からアマモが発芽し(写真1)、4月にはアマモが繁茂するようになります。このようにアマモは種子をつくり繁殖しますが、すべての草体が種子をつけるわけではありません。もう一つの方法である地下茎の分枝によっても繁殖します。アマモは8、9月に古葉が枯れて流出してしましますが、地下茎は生き残っています。秋になって水温が低下してきますと、この地下茎が分枝、伸長します。そして分枝した地下茎から新しいアマモが生えてきて、春頃にアマモ草体となります(写真2)。

海を浄化し幼稚魚を育てるアマモ場

アマモ場についての厳密な定義はまだありませんが、アマモが群落状に生育している場所をアマモ場といいます。アマモ場は潮流を和らげ、また、外敵からの隠れ場にもなるため、アミメハギやヨウジウオ、メバルやマダイなどの幼稚魚やヨコエビ、ワレカラなど小型動物の生活の場所となっています。さらに、富栄養化のもととなる窒素やリンを吸収し、水質浄化の面でも重要な役割を果たしています。近年は沿岸域の埋め立てや水質・底質の変化などにより、アマモ場が減少していることから、その回復を望む声が強くなっています。

アマモ場の回復に取り組む

このため、現在は全国的にこのアマモ場の回復を目的とする試験が行われるようになり、中予水産試験場でも、播種(はしゅ；アマモの種子を直接播く)という方法を使ってアマモ場を造成しています。平成10年11月24～27日に新居浜市阿島の浅海域に種子を播いたところ、1ヶ月後の12月24日には出芽を確認しました。これらは翌年8月に30～120cm(平均73.5cm)の葉体に生長しており、アマモ場が形成されているのを確認しました。しかし、このアマモ場造成方法では播種に使用する大量の天然種子を必要とするため、現在、中予水産試験場では組織培養の手法を利用して、人工的に大量の種子をつくる方法などの技術開発に取り組んでいるところです。

おわりに

沿岸域の埋め立てや水質・底質の変化などで減少してしまったアマモ場ですが、魚のすみか、海の浄化場などの機能をもつとても大切な場所です。海の中は普段目にすることがないため、私たちはその変化を見落としがちですが、漁業資源の減少や海洋環境の悪化が問題となっているいま、皆さんにもアマモ場の大切さ、回復の必要性についてぜひ考えていただきたいと思います。